今泉元甫の遺跡

―遺宅の松と三つの井戸の物語―

羽柴　弘

別府大学の佐藤義詮学長に『学禁余稿』と標題する郷土史の好著がある。随想風に、梅園や萬里、竹田などの先賢の事績を追想し、併せて二豊の人材数名の評傳や史話を集められている。且て佐伯中学校に教鞭をとられていた故人今村孝次先生との御関係の故であろうか、その大半に近いものがわが佐伯に取材されていて、その中に「今泉元甫畧書」の一項があり、佐伯藩の御典醫今泉元甫のことを述べられている。

いつ通つても物静かな上鉄砲町の通りをゆくと、古風な築地塀の上に長々と見事に枝を伸ばしている松、高さは五米ほどのその姿も悪くはないが、幹から塀の上を東に向つて約四米、西側は塀の上を長く長く這うて十一米、塀につづく木戸門にまで届き、つややかにその葉を晩秋の陽にかがやかせていて、佐伯市内第一の名木と言える景観である。そして道ゆく人たちに由緒ありげな邸宅としてながめられ、町の人からは「元甫堂」と且ての醫院の名を今も親しげに呼ばれているがここがその今泉元甫の遺宅である。

私は医家今泉元甫については、佐藤氏の前記の「今泉元甫聞書」と増村隆也氏の「佐伯郷土史」の中の一節より以上のことと知らないので、事あげて語る資格はないのであるが、最近の見聞調査があるので御参考までにあげて見たいと思う。

今泉元甫は父祖の代から佐伯藩の典醫として用いられ、醫療の技術卓抜を以て聞こえ、その仁慈の余沢は市井の庶民に及んでいたようである。そして平素の私生活は倹約簡素に甘んじて餘財を蓄積し、天明の大飢饉に際しては米百石を藩に献じ、更に寛政十二年の飢饉には再度米五十石を献げて窮民を救つたと言う。これは今日に引き直せば三百万円にも達するであろう。大したものである。好学のほまれ高い時の藩主毛利高標（たかすえ）侯は、元甫父子に時服を賜うて厚く嘉賞したと傳えられている。まことに嬉しい話である。

さてその元甫が「私財を投じて三つの井戸を穿つた。」（学禁余稿）という。

御存知かと思うが藩祖毛利高政は慶長六年日田より佐伯に転封、鶴屋城を築いてこれに拠り、浜荻生い茂る潟を拓いて城下町を営んだので、城下の人々は清冽な飲料水に事欠いで苦しんでいた。そこで元甫は市民のために城山の麓に三つの井戸を掘つて提供したというのである。即ち「今泉元甫の三義井」と伝え称しているそれであるが、その所在について語つて見よう。

その第一の井戸は「安井」である。それは城山の麓、山際の通り法務局前の道ばたにある。御影石の丸い大きな井がわに篆書で「安井」の二字が彫り込まれている。法務局の敷地が旧藩時代は藩の米倉があつた所から、俗に「お倉の井戸」と呼ばれているのがそれで、國木田独歩の作品「豊後の國佐伯」の中に描写されている通り、朝夕は水汲む人々が蝟集（いしゆう）したものであるが、水道が各戸に完備した今日では全く汲む人はなく、覗いて見ると水は底に浅くよどみ、勿論釣瓶などなく平素は誰一人近よるものもない模様である。このあたりは車の通りも少なく、城下町の面影をあちこちに見ることが出来るが、この井戸もその一つで道行く人の目にとまつて、フツと懐古の情を誘つてくれるのである。

第二の井戸はそこから五十米ほど三の丸によつた山際の片岡家（先年物故された片岡丈吉氏邸）にあり、有名な「唖泉」の位置である。然し肝心の井桁（いげた）はお隣りの平岩氏（佐伯印刷KK社長）の庭先にある。平岩邸は元片岡家の本家で、恐らく佐伯第一であろうと思われる壮大な木戸門をくぐると、すぐ右手塀近くにある小さな井戸の上に「唖泉」の井桁がのつかつている。

「唖泉」とは高標侯の名づくるところ、命を受けて藩学四教堂の教授松下筑陰が、

泌者泉　題之唖

非使飲者唖　以戒多言禍

と題したのが四角に組まれた井桁の一面に彫られてある。御訓読を試みてほしいが、要するに冗舌多辨をいましめられたもので、名君高標侯と碩学筑陰と、そして良医元甫の三人を一つに結んだ由緒ふかい井戸である。

今一つの第三の井戸はどこにあるか。佐藤氏は「その一つは杉谷小路に在るというが、名は伝わつていない。」とのべている。私は杉谷をあちこち探し歩いたが、どこにもそれらしい井戸はない。杉谷は西谷からもかなり離れていて、市民が朝夕使用するに適当でない。

増村氏は「その義井の一つは三の丸の下にあり」（佐伯郷土史下巻一四六頁）としている。なるほど三の丸の石垣の下、城山登山口の近くに井戸があり、且ては使用していたようであるが、そこは何と言うても搦手門（からめてもん）の内、即ち城内である。城内に市民常用の井戸を設けることは無理であるとして、以来私は数年間、第三の井

戸の所在を求めていた。

ところがそれは三の丸でも杉谷でもなく、西谷小路の奥まつたところに「甘泉」としてあつた。

つい先月のこと、市川市在住の山口正晴氏が久々に帰られ、所蔵の古書多数を市の図書館に寄贈されることになり、その授受に私もよばれて西谷にお伺いした。其処（西谷通りに面した藤本家の長屋門を右にはいつた奥）は山口家の旧宅で、庭先の井戸が今泉元甫が市民のために掘り、高標俟が自ら「甘泉」と名づけられたそれであるという。よくるほど語る山口氏が示して下さつた寄贈図書にも「甘泉亭山口蔵書」と蔵書印が押されてある。

井戸は冠木門の内にあつて、一段高く凝灰岩の切石でたたまれ、大きな凝灰岩の丸い井がわがデンと置いてある。どういうわけかどこをさがしても「甘泉」の文字はないが、位置と言い、大きさと言い、そして山口家の伝えるところと相俟つて第三の井戸にまちがいないものである。

山口氏のお話によると、当時は命名の如くその味甘美で、西谷界隈は勿論遠く般頭町あたりからも汲みに来たものであると言う。

今泉元甫が私費を投じて掘つて市民に提供した篤行もさることながら、「安井」「啞泉」「甘泉」と藩主自らこれに名づけられたということ、まことに泰平のよき時代の美わしい話であるが、時勢の移つた今日三つの井戸は今は全く眠つたような存在となり、やがては市民から忘れ去られようとしている。

今泉元甫の墓は市内岡の谷にある。高さは僅かに六十糎ばかり、それは童児の墓とまごうほどまことに小さく、正面に謹直な楷書で、

山水楽壽庵先生墓

とあり、向って右側に「文化五年戊辰正月十三日」と没年月日があるだけで、外に戒名や俗名も享年も何もない。そのかわり墓背に別に高さが一米五十位はあろうと思われる大きな碑が建てられてあり、長文の墓誌と小倉藩の儒官石川君潛（元甫が京都で師事した石川麟洲の嗣子ですぐれた儒者）の碑銘がしるされてある。私は何度も出かけて碑文を録取し、何枚かの写真におさめ、更に数日前佐伯史談会顧問の益田学氏（弥生町医師）がとれたその拓本と照合したのでその全文を掲げて見よう。

賺字は美しい篆書で横書に

山水楽寿菴先生墓碑銘

とありその下に次の墓誌並に碑銘が楷書で書かれてある。

君諱鼎宇(君寶)姓今泉氏初称鼎菴元甫晩自号山水楽壽菴考曰亨菴先生世居本藩以醫爲業先生三男二女二男皆夭女一適仲野氏一適同姓某君其長子也妣花井氏以享保十七年壬子生君々長嗣父業負笈京師從東洋山脇先生受其方盡其秘時小倉侯儒官麟洲石川先生授徒于部下因又師事

之之学成而帰其術大行家法雖専宗丹溪立斎間或撰用長沙氏方頗奏奇効聲名籍甚於是継父業為掌匙之職従　侯東覲及奉命赴江戸者数次天明五年乙巳六月以末疾告勞而退元配同姓惣右衛門之女生一女先卒女適浅澤氏継娶日出侯臣酉水氏生一男迪名先是養元配弟名簡為子以迪尚幼使簡継其業自是謝事養生優游自娯者十餘年于茲文化五年戊辰正月十三日無疾而逝享年七十七越十四日葬岡谷先塋之次　君天資廉介而敦篤其自奉也約周急也贍平素以先世遺訓諄々教子弟家道輯睦親朋悦服衆莫不欽稱不肖冏忝承其後哀迷之餘謹誌其世貫履歴之畧刊諸石樹碑背以告永世且託銘於麟洲嗣子君潛氏系之云

銘曰

志希孔顔　業宗岐黄　肄之有素
施以禁方　成己及物　其楽未央
名之不朽　壽也無彊

文化五年辰十一月　　孝子冏謹誌

小倉儒臣　石川剛謹銘

私は先日上鉄砲町の元甫堂を訪ねた。ちようど今住んでいられる今泉家の親戚に当る木許孝一氏は、庭先の塀の松に梯子を立て足場をかけて松のお手入中であつたが、お仕事の手を休めて快くお様に招じて下さつた。

お話によれば、今泉家はその後も医療に当り、元甫の遺風をうけて恭倹節約、巨萬の財を成した由であるが、当主は今泉元保と申され、横浜市役所にお勤めの由。時季がよいのでこのごろは毎日松の手入で特に松喰虫の防除に努力を傾けていなさるという。私は庭一面に散つている松の古葉をながめながら、どこまでも愛護してほしいと希望した。樹令は三百年にもなろうかなどとそんなお話も交したものであつた。

佐伯市上鉄砲町の物静かなたたずまいの中に、木戸門と築地塀があり、その上に長々と枝を張つている塀の松をもつこの「元甫堂」は、旧藩時代の佐伯の歴史の一こまをそのまま伝えている。そして山際と西谷の奥にある三つの井戸が、名君高標侯と良医今泉元甫の名をいつまでも佐伯市民に残してくれるであろう。

（佐伯市　佐伯史談会幹事）